鱗錦（うろこにしき）の局（つぼね）、捨文（すてぶみ）

中里恒子

中里恒子

鱗錦（うろこにしき）の局（つぼね）、捨文（すてぶみ）

中央公論社

鱗錦の局、捨文

定價一二〇〇圓

昭和五十九年七月十五日初版印刷
昭和五十九年七月二十五日初版發行

著者　中里恒子

發行者　嶋中鵬二

印刷所　精興社

發行所　中央公論社
〒104 東京都中央區京橋二-八-七
振替　東京二-三四
©一九八四　檢印廢止
ISBN 4-12-001309-X

鱗錦（うろこにしき）の局（つぼね）、捨文（すてぶみ）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章

相模國鎌倉郡、比企ケ谷に、妙本寺といふ古寺がある。中世の頃は、境内方八町、右大將頼朝の乳母、比企の尼の宅地で、一族の小御所、竹の御所などあつたところときく。

現在では、町のまんなかだが、山寺の趣は充分殘つてゐる。この寺の下の場所、山に圍まれた窪地を通稱比企ケ谷（やつ、やと）と言つた。谷は至るところに在る。扇ケ谷、佐介ケ谷、佐佐目ケ谷、などは、地名になつてゐるが、吾妻鏡、鎌倉地圖を見ると、眼についただけでも、白旗ケ谷、藥師堂ケ谷、紅葉ケ谷、馬場ケ谷、和泉ケ谷、桑ケ谷、西ケ谷、釋迦堂ケ谷、大御堂ケ谷、葛西ケ谷、山王ケ谷、經師ケ谷、無量寺ケ谷などがある。

三方を山でかこまれ、一方が海といふ鎌倉の地形では、戰場の機能としては利點があつたが、都づくりについて、平地は、重要な面積として、開發に頭を使はねばならない。從つて、墓所は、殆ど、谷の中、谷は山に續いてゐるので、谷の中に、やぐらを作つた。谷のあるところに、やぐらが集中してゐるのは、その爲であらう。やぐらは、大部分が墓なのである。

覺園寺裏山の百八やぐら、葛西ケ谷の腹切やぐら、衣張山やぐら、宅間ケ谷山上やぐら、いは

や堂やぐら、明月院やぐら、光觸寺裏やぐら……と、鎌倉幕府時代の騷然たる葛藤、寢返り、裏切、だまし討の跡が、歴然としてゐる。

谷は、從つてこもつた場所である。ひとつかみの靜寂を求めて、侍大將たちは、館を築き、わづかの安住の地としたのであらう。

しかし、その谷でも、悲劇は、絶えまなく起つた。

今は昔のものがたりだが、今では隱棲の地といふか、靜かな住居として、歴史とは無關係に、人人は住んでゐる。

比企ヶ谷にも、老女がひとり侘び住んでゐた。ゆきどまり同然の場所で、まことに淋しい道である。

この人は、花子が二十代の半ばすぎには、もはや、六十歳を超えてゐた。琴を教へてゐたので、ひと頃は、かなりの弟子もあつた。

ひとり者で、靜かなお師匠さんの、器量のよいことも、ひとに好かれてゐた。どうしてひとり暮しなのか、誰も、ききただしたりしないのである。

嫁入前は花子も弟子のひとりであつた。お稽古をやめたあとも、懷しくて、海棠の花を見物に行つた折には、お師匠さんをたづねることもあつた。

名ばかりの枝折戸を開けると、ちりちりと鈴がなる。

「いらつしやいますか、增田でございます、」

聲を張つて言ふ。格子戸に手をかけると、けたたましい呼鈴が鳴つて、戸が開いた。中から老

女が現はれて、
「増田さんの花子さん、まあ、お珍しい、」
「御無沙汰をしまして、どうなさつてをられるかと心にかけながら、遂、遂、」
「……いいえ、花の咲く頃にはお山の海棠を見たついでに、お立ち寄り下さる方があるのですよ、花が終ればまた、めつたにお眼にもかかりません、わたくしも、出無精で、」
もの腰態度、まだ、艶な面影もある。二間續いた部屋があり、火鉢のそばに、小机がある。
「ずつとお變りもなく、妹御さんたちは、」
「大阪住ひになりましたし、東京にゐた頃も、別でございましたからね、」
「……わたしなどは近くにをりましても、お稽古をやめてしまつてからは、おたづねも出來ず、たまには、お浚ひして頂きたいと思つてをりますが、」
「お子たちがいらつしやれば、さうなりますよ、」
小机の上には、經文が紙押へで開かれてゐる。寫經らしい。老女は、小机を押しやつて、茶など入れてくれた。花子は手土産をおいて、三十分あまりで辭さうとしたが、ひきとめられて、座を立てず、ま遠な話をきいてゐるうちだんだんに、惹き入れられていつた。
「昔のお話ですのに、今のことのやうに思へて、」
「……」
「うちの母など、御結婚を何度もおすすめしましたさうで、今でも、おひとりでは寂しからうと、殘念がつてをります、」

「いいえ、わがままですからこれでいいと思つてゐるのですよ、」
「お師匠さんは、お母さまがお弱くて、こちらへ移つていらしたのですつて、年輩の女中さんもゐて、母は、若い時から懇意にして頂いたと申してます、」
花子は、この師匠のはにかんだやうな靜かな立居に、氣をとめた。六十がらみの母の知人たちの、安住しきつた强情な姿を、身邊に見てゐるせゐもある。良人より實權を握つて、子供の教育も、出世第一で、娘の嫁ぎ先も誇らし氣に、言ひふらす厚顏な傾向があるのもきき苦しかつたので、お師匠さんの平靜さが、わざとらしくも思へたのである。
山の樹木がざわざわして、春の日もあまり射さず、陰氣な庭であつた。大きなひき蛙が、庭石の間を、鈍く動いてゐる。
「まあ、ひき蛙があんなところに、」
師匠は、格別の風もなく、
「たくさんをりますよ、お寺からぞろぞろ下りて來ます、」
「……寺內でも見ました、氣味がわるいので、地面は見ないやうにして、ひき蛙の群棲してゐる池があるからですつてね、」
お師匠さんは、火鉢に炭をつぎ足して、
「ひきがやつ、といふ土地の名前も、ひきの群棲地だからと、お思ひの方も多いでせう、なぜか、蛙の大きな、普通がま蛙といふ種類のが澤山ゐるのです、でも、この山內は比企一族の館でしてね、」

花子は、歴史で多少のことは習つてゐたが、老師匠からきく、比企ヶ谷ものがたりには、歴史以上の、身の毛のよだつやうな事柄が、深く埋つてゐるのが、今更のやうに、師匠の身の上と重なつて、ひしひし迫つてきた。

花子がきいた物語は、一度だけではない。老いた師匠をたづねるたびに、くりかへし語られた。それは、あとを追つてきかずにはゐられないほど、血のさわぐ語りであり、執念ふかいこの世の事實として、花子の胸を打つた。

師匠の話には、古い館の歴史があるばかりではなく、師匠一家をまきこんだ、女の生涯の春秋があつたからである。

お師匠さんの母親は、埼玉縣の農家の出で、東京に縁邊の者もあつたので、そこから女學校へ通つた。比企郡といふ土地が、埼玉縣の大部分にわたつてゐたことも、知つてゐた。

豪族であつたさうだが、比企一族の名殘のものは、何のあとかたもなかつた。

「わたくしの母は、東京の親戚の世話で、女學校と言つても、お裁縫で名の通つた學校を出て、まもなく、嫁にゆきました、田舎のお嫁さんと言はれないやうにと、充分すぎるほどの仕度で、藏前の乾物問屋へとつぎました、埼玉の農家でも、手びろくやつてゐましたから、乾物屋さんとも、とりひきがあつたのかもしれません、大世帶でしたから、母は、奥むきの繕ひものなど、いつもしてゐたさうです、

その頃は、小僧さんたちの仕着せも、和服でしたし、舅、姑も、父も、和服でしたから、普斷着の縫直しから、足袋の繕ひも、絶えまがなかつたやうでした、でも、母は針を持つことが好きで、裁縫は、重ねの着物まで縫へたさうです、

わたくしは、ひとり子でしたから、祖父母が手ばなさず、母には、あまり甘えたことはありませんでした、お盆には、母が供の者を連れて、埼玉の實家へゆきました、お墓參りが濟むと、母は、一晩泊るだけで歸りましたが、わたくしは、母の弟たちと言つても、叔父に當るひとから、可愛がられて、夏休みを、そこで過すのが習慣になつてしまひました、

比企郡の比企一族の歴史は、叔父たちから敎はりました、それが、そのときは、歴史は歴史としてしか、心に殘りませんでしたが、後年、母とふたりで暮すやうになつてから、しみじみと、母の苦惱を思ひやることが出來まして、わたくしは、比企のものがたりが母の生涯と重なるやうに思へてきたのです、」

かういふお師匠さんの、靜かな話をきいてゐるうち、花子は、事件のあつた昔の語りを、ぽつりぽつり書きとどめた。比企一族の歴史ではあつたが、これは、人間の爭ひのもとになつた嫉妬から、始つてゐるやうに思へたのである。

嫉妬と言へば、女の特徵のやうに言はれてゐるが、どうして、男の嫉妬は、もつと深く、殘酷でさへある。花子は、思ひつくままに、自分の考へを加へて、お師匠さんの話をきき書にした。もちろん、比企一族の全滅についての記錄が、一層、花子にお師匠さんをも思ひ出させるからである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「お師匠さんには、腹違ひの妹さんがゐましたが、比企ケ谷の家に住むやうになつたのは、母親が病歿し、それから今まで家族とは無關係になられて、小さな一軒家を買つて、湯殿と、明るい臺所を、廊下につづけて建て增して、全くのひとり暮しとなるやうになつてからのことで、暇も出來て、その邊をぶらぶら歩いたりなさるやうになつたとき、山の上にある妙本寺に、比企一族の墓があることを知つて、なにやら身につまされて、おしらべになり出したのです、」と、花子は語る。

比企一族は、武藏國比企郡に領地をもつた、豪族といはうか、武將でした。

比企掃部允、比企の局は、源頼朝、頼家父子二代の乳人として仕へてゐて、源家とは深い間柄でありました。

平治の亂に敗れた源家の頼朝も、十三歳で平家に捕へられて、伊豆へ流されて、頼朝は、三十四歳になるまで、蛭ケ小島を中心に、流人としての二十年を送りました。比企の局は、良人とともに、故郷比企郡中山郷に戻つて、流人の頼朝を、かげながら手厚く面倒をみてをりました、さうせずにはゐられなかつたのでせう。

良人比企掃部允が病死してからは、局は髪を下して、比企の尼と呼ばれるやうになりましたが、乳人としての氣持は變りませんでした。

曾つては源家の恩を受けた東國の武士たちの殆どが、平家になびいたなかで、比企一族の親身

な情愛は、不運な頼朝の心に深く身にしみて、溫かい、つつましい乳母の手を、頼朝はどんなにか信頼して感謝したことでありましたらうか。

苦節苦難の二十年のちに、やつと時勢は轉換しました。頼朝に、日が射したのです。治承四年の八月、石橋山で義兵をあげ、一度は敗走しましたが、安房に行き、上總下總を從へて、十月には、鎌倉に攻め入りました。

疾風のやうに頼朝は幕府を開き、將軍となつたのです。由比の鄕鶴岡にあつた若宮の青紅葉の下には、野菊や蓼の小花も咲いてゐました。伊豆と言ひ、上總下總と言ひ、頼朝は、海邊に緣があつたと言ひませうか、海そのものが好きであつたのかもしれません。激しい氣性である反面、海のやうな果しないおほらかなものに、惹かれる性質だつたと思はれます。

弟義經を疑ひ、たうとう追ひつめてしまつたのも、嫉妬も手傳ひ、完全主義者としての、ことごとく掌握しなければ氣のすまない小心な一面もあつたのでせう。權力を握ると、ひとは、疑心暗鬼を生みがちなもので、頼朝のやうな、苦難を超えてきた男でも、世の中の冷酷を體驗してきただけに、權勢も安らかなものではなかつたのです。

頼朝の屋敷は、大藏の北、方六町ばかりの地形に、大藏幕府跡として殘つてゐますが、その頃の土地の境界をしらべた話によりますと、南は大藏の街道、西は鶴岡、北は荏柄に當つて、四面に門を作つたと言ひます。

門外の地名を、東御門（みかど）、西御門、南御門と申して、北は御臺所の御所をお造りなされた。鶴岡別當坊のあたりに、北御門があつたときいてをります。

棲家に必要なのは、道です、昔も今も、道路が出來ると、町が賑ひ、生活の場がひろがり、往來が都合よくなりますね。頼朝も、幕府を造營すると、すぐ道路も修築して、家臣たちの屋敷も、道路に添つて作つたやうです。先づ、若宮大路と呼ばれてゐる道を計畫しました。鶴岡から南へ、由比ヶ濱まで直線の道路で、置石をおきましたさうで、置石といふのは、大路の中央に二列に堤を築いて、一筋の道幅を、三筋にしたのです。頼朝の、都市計畫の最初のものでございませう。

堤の足元に石を置いたこの路を、段葛と言つて、一の鳥居から、二の鳥居、三の鳥居と、鶴岡社前までつづいてをりました。

頼朝は、幕府の基礎が出來、政權の實がかたまつて來ると、先づ、恩を受けた比企の尼のことが思ひ出されて、そばにおいて面倒を見ようと考へました。

疑心のつよい反面、信頼する人間に對しては、優しく心を開いてゐたわけなのでせう。

可愛さも、憎さも、いいかげんでは濟まない徹底した氣性の方、味方にしたらありがたいひと、敵にまはしたら、凄いひと、弟の義經追討のきびしさ、むごさを想像しても、判斷がつきますが、比企一族に對しては、思ひやり深いお上であつたわけです。

若宮大路に添つた琵琶小路に程近い山あひの比企ヶ谷に、竹の御所、小御所を造營した比企一族は、頼朝幕下の信任厚い家臣として、武州埼玉から移り住みました。

その頃の山あひは、清水の滴る鬱蒼とした杉林の下に、じめじめと苔がひろがり、蛇や、ひき蛙はじめ、山猿も狐狸の類も棲息してゐたのです。三方が山に圍まれ、南に海が開けてゐる土地ですから、氣候も溫暖で、植物、動物も、棲みよかつたのでせう。

古書を讀んでも、語りつがれた物語をきいても、鎌倉といふ土地は、水質がわるかつたのです。頼朝幕府の城郭内でも、社寺のあつた、小さい谷あひの山裾に、わづかに良い井戸があつたやうで、鎌倉十井の一つとして、現在でも、名をとどめてをります。

比企ヶ谷には、よい水はなく、山清水、湧水は、豐富でした。十の井戸としては、覺園寺ヶ谷の棟立井と、淨智寺ヶ谷の甘露井と、雪ノ下の鐵の井と、長勝寺の石の井などのほか、名水としては、建長寺の金龍水、不老水、扇ヶ谷の錢洗水、大町の日蓮乞水、十二所の梶原太刀洗水が、名だたるものでありませう。

比企の尼の一族は、ひき蛙の多いのを見て、

「ここは、福のある土地です、ひきは、山中の靜穩なところに、繁榮するのです、」

「武藏の領地は、廣い丘でござつたし、風が強くて、乾き氣味のところ、あまり、ひき蛙はをらなんでしたな、」

比企の局は、見た眼に、ひき蛙のぞろぞろした樣子は、どうも不氣味には思ひましたが、福の守りだとの、言ひ傳へに、無言でうなづいてゐました。

屋敷のまはりに群棲するひき蛙も、池を作れば、池の中に、群が移るのではないかと思ひました。

「いかがでせう、福のお守りたちが棲みよいやうに、御所の上の庭と、小御所のそばと、二つぐらゐ、大小の池を掘りましては、」

「庭の眺めとしても、結構であらう、」

上の池と、下の池は、まもなく造成されはじめました。
池の水は、山の清水をひいて、充分足りるのです。また池は、山あひの湧水を貯めるためにも、適切なものでございました。
藪椿の花が、苔の上に點點と散つて、花が動き出したやうに、ひき蛙の交尾が始つてゐるのです。
「なんでございませう、白い紐のやうなものが、」
「ぶよぶよ動いてをります、」
局と、侍女たちは、透きとほるやうな紐を、氣味わるげに覗いてをりました。
春が晩いと言つても、遠くの山櫻も霞んで、風は生ぬるく吹いてゐるのでした。池には紐のふくらんだぶよぶよのものが、幾つか、風に動いてゐます。
近習のひとりが、局の侍女に語りかけて、
「わたくしは、武州も山奥の里の生れでござつて、蛙、蛇などは、身邊に見馴れてをつた、あの透きとほつた紐の中には、蛙の卵が産みつけられてをり申す、」
「すると、子種ぢやな、」
「左様、それを、踏みつぶしたり、捨てたり、無益な殺生もいたしたもの……」
「ても不憫な、おそろしいことぞ、」
比企の局は、默つて、その話をきき、
「子種を殺すとは……」

つぶやきながら歩きはじめました。

比企掃部允と比企の局の間には、三人の娘がをりました。長女は、二條天皇に仕へた、丹後の内侍で、歌びととしても名のあつたひとですが、惟宗廣言といふ侍と密通して、男子を産みましたが、比企家ではそののち、武藏の安達藤九郎盛長に嫁がせました。そして、内侍は五人の子女を産み、その一女は、源範頼の正室になつてをります。益益、比企家は、源家と關係が深くなつて、頼朝公にも眼をかけられましたのです。

時の權力者に重用されるといふことは、その當人には惠まれたことでありましたでせうが、その反面に、おもしろからぬ思ひの人間の、嫉妬の的にもなりがちなもの……戰雲漂ふなかで、ひとの寢息をうかがふ武士たちは、比企一族の厚遇をねたましく思ふやうになりつつありました。

武藏の國の田舍侍が、幕府の要職にゐることを心よく思はぬ筆頭は、頼朝の正妻、政子の北條一族でございました。

頼朝が開幕以來の側近の武將は、大庭景能奉行をはじめ、安倍晴明、和田小太郎義盛、加々美次郎長清、毛呂冠者季光などのほか、北條一族、足利冠者義兼、山名冠者義範、千葉介常胤一族、土肥次郎實平、岡崎四郎義實、工藤庄司景光、佐々木太郎一族、畠山次郎重忠までの面面が供奉してをりました。

比企一族は、頼朝の不遇の時、家庭的な世話をしつづけたといふ、言はば政治面では側近の武

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com